

共同研究報告 J. S. ミルの自由主義をめぐって

1. 共同研究のテーマ

J. S. ミルの自由主義をめぐって

2. 共同研究参加者

学内研究者：福吉勝男、森哲彦、別所良美、寺田元一

学外研究者：深貝保則（東京都立大学教授）

3. 研究内容

夏休みまでの期間は、J.S.ミルの自由主義を、彼の主著を検討することで、解明した。取り上げたのは、彼の『自由論』と『功利主義論』であった。数ある著作の中でこれらを取り上げた理由は、これらにおいて、ミルの自由主義の根本問題である、個人の自由や経済的自由と、平等や福利、公益（総じて公共性）の実現の関係という問題が扱われているからである。原文を読むことを中心にして、訳文も参照しながら読解を進め、以下のようなことが明らかになった。

ミルの自由主義は、「多数者の専制」や政府の干渉を排し、「個性の自由な発展」を高く掲げる点で、現代的な意義を有する。しかし、個々人の社会的・物質的条件などの違いを無視して、個人の自己決定権を極端に重視する姿勢には、結局、「個人の自由競争」を通じて「強い個人」が勝ち残り自己実現を果たすことを、自由主義の必然的帰結として是認してしまうという、今日のリバタリアニズムの弱肉強食につながる問題点がある。さらには、エリートによる自由な自己実現が個人の徳と社会の徳とを実現するという、エリート主義がそこにはある。また、政府が子供の教育などの公共的な社会的・物質的条件整備にどこまで関わるべきかという点で、多くの曖昧さがある。リバタリアニズムのように、そうした政府の公共的役割を全面否定するわけではないが、政府の援助と干渉との間の線引きが、ミルでは曖昧であり、全体に政府の介入には消極的である。

他方で、ミルはその功利主義において、「最大多数の最大幸福」という公共性に関わる議論を展開している。そこでは、もはや個人の幸福ではなく、社会全体の幸福が問題となっている。そこではしたがって、個人の自由以上に社会全体の幸福の実現が重要な課題となる。かくして、個人の自由と功利とをいかにして両立させるかという根本問題が、ミルの前に現れることになる。すなわち、功利の原則は「多数者の専制」となるのではないか、利己的な「個人の自由の実現」は個人の幸福は創り出しても、他者を不幸にし、結局、「最大多数の最大幸福」につながらないのではないか、いかにして「高貴な性格」や「公共善への関心」を陶冶するかといった問題である。ここで当然、政府や教育やメディアなどの公共的役割が問題になるはずだが、それは政府の干渉を排するという自由主義の原則とどう折り合うのか。

『自由論』と『功利主義論』では、これらに対する回答は明確には与えられていない。ミルの

議論は時事的であり、多くの矛盾を抱えながら、開かれた形で存在しているといえよう。ただ、問題なのは、そうした時事的性格にも関わらず、当時勃興しつつあった労働者階級をめぐるような問題やマスメディアに関する議論などが欠如しており、社会的広がり弱い点である。そして最終的には、現在のイギリス社会が自由と公共善とを予定調和的に実現するだろうという楽観主義に到っている点である。その背後で、現実には貧困や差別、抑圧が多くの人々を苦しめていたにもかかわらず。そうした問題点は、現代のリバタリアニズムにも共通する問題である。

このような考察を踏まえて、秋には東京都立大学の深貝教授の講演会を開催し、ミルについての認識をさらに深めることができた。深貝氏は「J.S.ミルにおける功利主義的目標と実践的アート」という、われわれの問題関心に直結するテーマで講演を行った。氏は、最近のミル研究の現状を紹介された後、矛盾の多いミルの構想を、『論理学大系』の「アート・オブ・ライフ」の議論を軸として統一的に読むという新たなミル解釈を提示された。それによると、市場社会における自由の発揮が、人間性や個性を発展させ、それが公共善を実現するという考えがミルにはあり、そこに自由と公共性の対立を乗り越える方向性が見出されることになる。しかも、ミルにとって公共善は、単に最大多数の最大快樂ではなく、徳と知ある人間の正義や便益へと、質的に向上していくものであることも、明らかとなった。そして、このような質的向上を助ける手段として「アート」はある。ミルは政府による干渉を全面的に否定したわけではない。「アート」による非権威主義的干渉は人間性や公共善の質的向上を助けるものとして、肯定的に位置づけられているのだ。

講演後においては、「アート」による非権威主義的干渉もリバタリアニズムからすればやはり権威主義的干渉になってしまうのではないかと、市場社会が恐慌や失業、貧富の差などを生みだしている状況で、どうしてミルは市場による人間性の進歩を唱うことができたのかといった疑問が出され、活発な議論が展開して充実した講演会となった。

ミルにおける自由と公共性をめぐるアポリアが解決されたわけではないが、この共同研究を通じて、その問題系の思想的構造が明確に浮かび上がってきた。リバタリアニズムには、人間性や公共善の進歩といった視点や、「アート」の役割への着目はない。しかし、現代のリバタリアニズムに失われ、19世紀の自由主義に生きていたこのミル的視点が、現代の自由と公共性をめぐる議論に対し、示唆するところは大きい。これこそ、今後ともこうした思想史的アプローチが求められる所以であろう。

(文責 寺田元一)